

ナースインホームひまわり

症 例 概 要 利用者氏名：H様（80代、男性 要介護5）

利用期間：平成29年9月～現在

経過：平成29年7月、腫瘍発見される。同月、呼吸苦にて、救急搬送され、甲状腺腫瘍による気道狭窄の為、気管切開術を受けられる。9月に両側声帯麻痺改善し、気管孔閉鎖となる。腫瘍は悪性リンパ腫（B細胞リンパ腫）と診断され、現在も通院にて抗がん剤治療中。家族介護困難な為、12月の抗がん剤治療が終了し、次の施設が見つかるまで、ナースインホームひまわりにミドルショートの利用となった。

内 容

H様は入所当初より夜間のナースコールが頻繁に見られ、尿意や足の痛み等の訴えが1時間に数回あり、一晩中眠られない日が続いていました。昼夜逆転している様子も見られた為、昼間はなるべく起きて頂き活動への参加を促し、生活リズムをつくるよう取り組みました。睡眠のパターン表も作成し、眠剤があまり有効ではない事も分かり、眠剤に頼るのではなく落ち着いて良眠して頂ける方法を職員皆で話し合い検討しました。まず、尿意の訴えに対しては、H様とご家族様に相談し、夜間のみオムツで対応することにしました。それでも最初は何度もナースコールで呼ばれ、オムツではなく尿器に排尿されていましたが、少しずつオムツに排尿する事で長時間の睡眠が取れるようになりました。足の痛みに対しては、毎日午後から足浴とフットマッサージをするようにした事でリラクゼーション効果もあり、足の痛みによるナースコールも減少しました。

H様はある介護員に「おめー、いつからここで働いてんのや」とか、「親父、変わらないのが」等、知り合いの人に話しかけるような様子が見られました。ご家族様に確認したところ、親戚の「Mさん」と言う方とその介護員が、体型、髪型、元気な所がそっくりだとお話され、そのそっくりなみつえさんになりきってH様と接することにしました。「嘘も方便」と言いますが、中等度の認知症のあるH様には、親戚のみつえさんがいつも近くにいる事で安心して生活できている様に思えます。入所したばかりの頃は居室で休んでばかりいましたが、今では午前午後とはりきってホールの活動に参加され、体操、ゲーム、唄、脳トレ等、毎日笑顔で取り組まれています。H様は「100歳まで生きたい!」と話され、目をキラキラさせ最高の笑顔を見せてくれています。

ご家族様からも、「何件か施設は利用したけど、ここが一番いいね」と、賞賛のお言葉を頂きました。落ちつかないから、眠らないからと、直ぐに眠剤に頼るのではなく、ご利用者様が安心して生活できるような環境を整えるのも、介護現場で求められる事を実感した事例でした。

H様は、12月の抗がん剤治療が終了して次の施設が見つかるまでナースインでの生活が続きますが、それまでその介護員は親戚のMさんになりきり、穏やかに生活して頂けるように、これからもケアを継続していきたいと思います。